

(発表題目)

自分なりの根拠をもち学習問題を追求する児童の育成

新潟市立鎧郷小学校
眞島 拓也(平成20年度)

(主張)

社会科の学習において、児童の考えを単元の中で深めていくためには、児童の考えに根拠が必要となる。今までの実践から、その根拠は、児童の生活経験と学習内の体験活動から得られた知識が基盤となっていた。

本研究において、以下の点について重点的に取り組むことで、学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」が実現し、単元全体を通して自分なりの根拠をもち学習問題を追求する児童の育成を図れると考えた。

◎体験活動の設定

児童の意識に沿い、問題の焦点化を図ったり問題意識を高めたりする。

○個の思考を深める交流活動の設定

共通の体験活動を通して知識を得たり、資料から自らの考えを導き出したりした児童が、相互にお互いの考えをつなげたり比較したりする中で自分の価値判断をより確かなものにする。

本研究における児童の具体的な姿

体験活動や友だちとの交流から自ら解決したいと思う「問い」をもち、話し合いを通して自分なりの考えを再構築し、社会的事象のもつ意味を考える姿

1. 研究主題設定の理由

(1) 主題設定に至る子どもの実態と課題

① 学習指導要領で目指す社会科の目標と当校の実態から

学習指導要領における社会科の授業で目指す児童の姿は「人々の生活の変化や働きの相互の関連の意義を自らの生活と関連付けて考察しようとする」ことである。

新潟市立鎧郷小学校は、豊かな田園地帯が広がる地域にある学校である。1年生から6年生まで学級数が1クラスずつの小規模校である。そのため、クラス替えがなく、学級の間関係性は、固定化されている現状にある。友だちとの関係性が良好であれば、お互いを高め合い、考えを醸成しやすい環境となる。一方で、関係性が希薄であれば、その逆に考えを出し合い、協同して学習に取り組むことが困難にもなる。

社会科の目標である自らの生活と関連付けて考察するには、具体的な場面を想起しやすい共通の体験をした友だちとの対話による思考の交流の場を設けることで、友だちとのより良い関係性を築き上げ、お互いの意見をつなげたり、比較したりする中で、自己の価値判断の根拠をより確かなものにできるのではないかと考えた。

6月に本学級児童23名に対しアンケート調査を行った。この結果から、児童が見学や調査などの体験活動を好む傾向にあることが分かった。

アンケートや教師の見とりからクラスの中で自分なりの根拠をもって意見を言える児童は、23人中6人程度であった。また、授業によっても差がある。これは、授業者の発話が多く児童が社会的事象を自分なりに根拠づけて考える活動が少なかったり、体験活動を単元の中に上手く位置付けられなかったりすることが主な要因であると考えられる。

以上から、体験活動を有効的に活用することで児童の考えが根拠をもったものになると想定した。

② 自分の研究や実践の歩みから

これまでの社会科の実践では、体験的な活動を単元に組み込み研究を行ってきた。上越市立有田小学校第4学年「昔から今へと続くまちづくり」(平成30年9月～11月実施)では、単元に体験活動を仕組み、授業づくりを行った。児童は、自分なりの考えを資料と関連付けたり、体験活動から知識として社会的事象を認識したりする姿が見られた。しかし、体験活動を効果的に単元に位置付け、授業と授業を関連付けた児童の問題意識の高まりが見られなかった。これは、教師の単元を貫く学習問題の設定があまかったことと合わせて、授業ごとのつながりが、児童の思考に沿ったものではなかったからである。

上越市立有田小学校第5学年「食料生産を支える人々」(令和元年6月～9月実施)第5学年「工業生産を支える人々」(令和元年9月～11月実施)これら2つの単元において、体験活動を児童の実態に合わせて単元計画に取り入れた。「工業生産を支える人々」では、発話内容や成果物から児童の問題意識の高まりが見られたと同時に児童の思考の流れに沿った授業展開ができた。その中で、児童の発話や成果物に着

目した結果、1時間の授業内発話の数の内、児童の発話数に比べ、教師の発話数が多いことが分かり、抽出した児童以外の児童に目を向けた時、教師の発話数の数に応じて、児童の学習問題への意欲の高まりと関連しているのではないかと考えた。

新潟市立鎧郷小学校第3学年「地域の安全を守る」(令和5年9月～10月実施)においては、児童の身近な「場所・人・もの」を体験活動に取り入れ、児童の発話から問題意識への高まりが見られた。しかし、補助発問等の教師の発話が多く、誘導的になってしまった。

したがって、本研究においては、児童の授業内の発話数を増やすことで、考えや問いがよりいっそう深まり、学習問題に対して自分なりの考えをもちながら追求する児童の育成を目指す。

2. 研究内容と方法

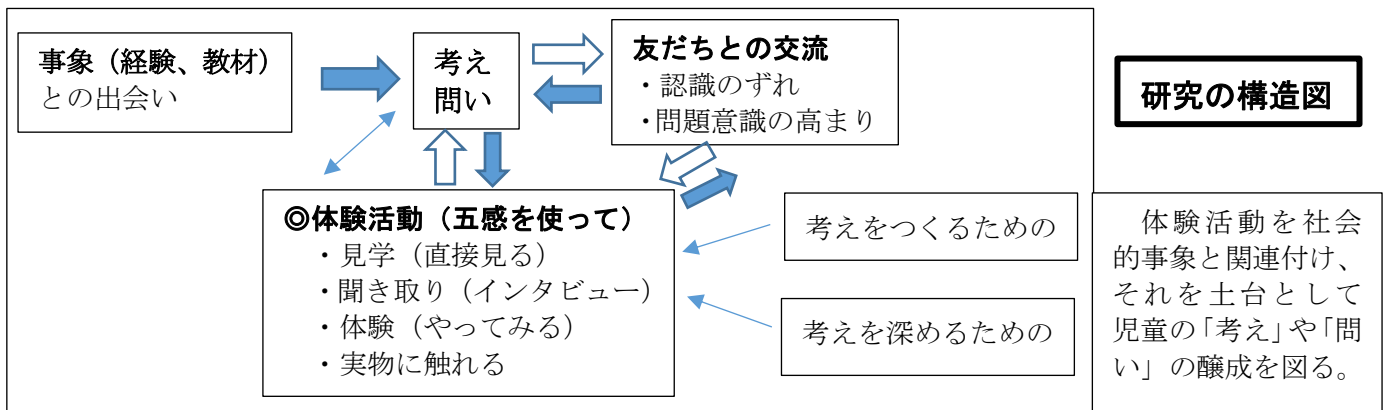
【研究内容】

社会科の授業の捉えとして、単元を通して、児童の学習問題を醸成していき、その解決にせまるという観点から、以下の単元を児童の思考の流れに沿って仕組むことで児童の成長を図る。

(単元1) 第4学年「水はどこから」

令和7年6月～7月実施

(単元2) 第4学年「自然災害(豪雨)にそなえるまちづくり」令和7年9月～10月実施



【研究対象】

新潟市立鎧郷小学校の児童、令和7年度4年1組23名

【検証方法】

本研究では、体験活動を主軸とした活動を行う。体験活動や交流活動の有効性について各々個別の検証は児童の見取りからは、難しい。したがって、活動を複合的に捉え、授業の中で対話的活動を行った際に児童の発話が体験活動や資料から考え出されたものかどうかについて、授業全体の発話やその中の抽出した児童の発話、また授業のまとめの記述、質問紙などから本研究で目指す児童の姿が見られたかどうかで検証する。

山根・中川(2005)は、社会科の授業における授業者と児童の発話パターンを分析し、類型化した。また、小野間(2018)は、その類型化したものを定義し直した。それらの研究の中で、児童の発言パターンは、計6種類(発言、追加、反復、反対、質問、応答)である。また、授業者の発言パターンは、計12種類(意見、追加、反対、応答、質問、指名、解説、助言、指示、発問、確認、評価)である(資料1)。本研究においては、1時間の授業発話をパターンごとに分け、児童の主体性を分析するとともに授業者の発言が児童の発言にどのような影響を及ぼしていたのかについても分析を行う。発話については、教室の後にカメラ1台を設置し、班ごとにボイスレコーダー1台(計7台)を使用して授業者と児童の声を記録する。

さらに、児童の発言の中に根拠として体験活動と関連しているものについて、種類分けしたものを発話内容に着目して分析する。また、単元ごとにまとめとしてノート作成を児童に行わせている。発話分析で現れなかったことについて文字資料を使って補完する。

3. 研究仮説

児童の実態に応じた体験活動を仕組んだ指導計画をつくり、児童の発話を中心とした実践を行えば、児童が個々の考えを伝え合うことで問題を共有化し、自他の考えを検討し合う中で自分なりの根拠をもち社会的な事象について考えることができるようになるだろう。

4. 研究の実際

(1) 実践1 単元名「水はどこから」(資料2)

① 児童が個々の考えを伝え合い、問題を共有化している場面

本時までに行ってきた内容を想起し共通の土台で話し合いを行っている。水道管がないことを仮定した話し合いの場面で第3時に学習した川からとった水が浄水場を経由し様々な場所に水が供給されていること、第4時から第6時に行った浄水場の見学で学んだ川の水を直接飲むと病気になった歴史があること、さらに、第2時に実際に川の水を観察したことや第3学年時の火事が起こると川の水を使い、消火しなければならないことを根拠として、水道が使えなくなると地域に安全な水が供給されなくなってしまうことについて話し合い問題を共有化している。

T16	Yさん。	第7時：授業開始9分頃
C23Y	はい。水道がないと大火事が起きたら、病気になる。 <u>(川の水を使って消火することを想起)</u>	
T17	なるほど。よく勉強してますね。	
T18	はい、Tさん。	
C24T	<u>家庭に水が送られなくなる。</u>	
T19	だよな。そうだよな。	
T20	Aさん。	
C25A	はい。えーっと、Tさんと似ていてあの家庭や学校、病院などに水が送られなくなる。	

② 自他の考えを検討しあう中で、自分なりの根拠をもち、考えを深める場面

水資源について考える際に本時までの知識や生活経験を根拠にして発言をしている。授業の前半ではクラス全体で水道代に着目し、話し合っている。

T36	はい、Sさん。	第14時：授業開始12分頃
C39S	水道を使うと水が減ることだから水が減る。	
C40Y	水道代が高くなる。	
T37	はい、Yさん。	
C41Y	はい、みんなが水道を使うとみんなの水道代が高くなる。	

A児は、班での話し合い時に川の実態について話し始めたが、F児が話の内容を修正し、授業前半に話題になった水道代のことから、節約に着目し直した。

C93①A	川が汚れば汚れるほど	第14時：授業開始20分頃
C93②F	でも、どう行動するかだから	(4班の話し合い)
C93③A	でもでもさ、節約もいいんだけどさ、水道の水を使いすぎるとさ、それで水が無駄になるから。	

また、登校中の川の様子からごみを減らさなければいけないということや、前時に出てきた水資源を守る活動を行っている地域のボランティアに着目しながら、自分の意見を根拠づけている。また、これまでの学習の内容を受けて今後の自分として「水を大切にしたい。」という価値判断をしている姿が見られた。

C93④A	登校中にさなんか紙切れ落ちてたからさ	
C93⑤A	とりあえず、まとめよう、節約したり地域のボランティアと協力したりごみを減らしたりする。	

T59	じゃあ、最初にみたいなって人いますか。Aさん。	第14時：授業開始30分頃
C102A	えーっと、前の社会の意見と似ているんですけど、えーっと、節約をしたり、地域の人ボランティアと一緒に水を無駄遣いしないように協力して水を大切にしたい。	
T60	とてもいいですね。	

〇実践1の考察

実践1では、第1時から第15時(第4時から第6時の浄水場見学以外)すべての授業の文字起こしを行った。その結果、単元の流れの中で、どこで児童が変容しているか捉えることができたと共に児童が体験活動や交流活動を通して学習問題を考える姿が見られた。しかし、児童の発話数に対して教師の発話が多く、児童同士が自他の考えを比較検討するという活動が弱かった。また、発話のパターンにおいても第1時と第15時の差が分かりにくかった。児童の中心の授業展開にすることにより児童の問題意識が高まり思考の練り上げが行われるようにしていきたい。

(2) 実践2 単元名「自然災害(豪雨)にそなえるまちづくり」(資料3)

本実践では、実践1の反省を踏まえて指導計画を考えた。前単元では、体験活動を飲料水に使われている川の水を採取して比較した後浄水場の見学を行った。本単元においては、近年身近な問題になり児童も体験している豪雨を採り上げ、国土交通省の新潟防災センターでの豪雨体験や新潟市役所の防災課職員から新潟市の防災について直接聞く活動を採り上げた。また、教師の発話数を意図的に減らし、児童の発話の補助に努めた。本単元においては、児童の変容がよくわかる第1時と第8時のみを文字起こしして分析を行った。

① 児童が個々の考えを伝え合い、問題を共有化している場面

C263C	えーっと、ぼくはマンホール	第1時：授業開始20分頃	C316G	理由は、雨だったら、あの、雨の跡があるんですけど、雨のはねた跡がないんで雨じゃないと思います。	第1時：授業開始30分頃
	ホールのふたが吹っ飛んで、水の方でマンホールが吹き飛ばされてで、水が今こんな感じになってるんだと思います。		C317Y	はい。	
C264Y	C。		C318	ちょっと、まって本当だ。	
C265C	はい、Yさん。		C321Y	最近、雨、たくさんところで降ってるんですよ。	
C266Y	あのこれ近いので、雨が降って水道管からあふれている。		C322T	ああ、降ってますね。	
C267T	確かにあるかも。		C323Y	だからここは、どっかの県ですごい降っていて、こんな感じだと思う。	

第1時で、新潟県内の自然災害について写真資料を提示し、その気付きから問題点を話し合った。写真資料は、地震、雪、豪雨、火山である(資料4)。火山は妙高市と糸魚川市にまたがる焼山の写真、雪、地震、豪雨は、近年の新潟市の写真を使用した。児童は、火山については、身近になく体験したことがないため考えの根拠が想像したものになってしまったが、雪、地震、豪雨については、実際に体験をしているので考えの根拠が自ら体験した知

識に基づいたものになった。授業開始 20 分頃には、前単元の学習から水道管が災害によって壊れたことを想起した発言をしている。C 児の発言に対して Y 児が別の視点から発言し、その発言について T 児が同意をしている場面である。また、授業開始 30 分頃には、G 児が自分が体験した雨の様子について理由を話している。そのことについて、Y 児はニュースや自身の経験から得た知識をもとに反対意見を言い、それに T 児がつぶやきで同意をしている。

② 自他の考えを検討し合う中で、自分なりの根拠をもち、考えを深める場面

第 8 時は、学習のまとめの時間である。本時までに学習した内容をまとめて次の時間に自分たちの防災マップを作ることを明示した。新潟市で豪雨が起きたことを想定した話し合いでの授業前半 5 分頃には、第 5 時の市役所の防災課職員からの話の内容や国土交通省新潟防災センターの見学での体験を自分なりの根拠として話をし、他の意見に追加で発言をする児童の姿が見られた。また、防災センターの豪雨体験を振り返った授業の中盤 25 分頃には、C64 の C 児の自分の経験と関連付けた昨日の雨についての発言をきっかけにして、クラスで豪雨発生時の問題点を話し合い、C73 以降の発言ではその問題点から避難することに発話につながり、避難時に持っていくもの等の話をする姿が見られた。

		第 8 時：授業開始 5 分頃			第 8 時：授業開始 25 分頃
T20	A さん。		C55	A でいいよ。	
C26A	Y さんと似ていて、豪雨が起きたら避難警報もそうなんですけど、例えばニュースとかで大雨警報を見たりする。		C56A	えっと、あの雨の何ミリとかもあつたし、正直豪雨も最後 187mm、もっと強く感じました。	
C27S	はいはいはい。先生、先生。		C61S	普段の新潟の強いレベルの雨じゃなかった。最後の	
C28A	S さん。		C62Y	確かに	
C29S	あの、洪水とかなった状態でもいいんですか。		C63S	レベルがちがかった。	
T21	もちろん。		C64C	<u>でもさ、昨日の夕方の雨やばかった</u>	
C30	豪雨で洪水とかなったら自衛隊とかが来る。		C65R	いやでも	
C31	まだ、当たってない人。		C66T	そうだよ	
C32	Y。		C67Y	かみなりもすごかった。昨日の夕方	
C33Y	国土交通省がなんだっけ、まってください。国土交通省が配水ポンプ車を出勤させて水とかを吸い取る。洪水が来たら。		T31	今、昨日の話が出ましたけど、昨日の雨みなさんどう思いました。	
C34Y	C		C73R	何ミリか分かんないんだけど	
C35	ほぼ Y さんに付けたしなんですけど、配水ポンプ車で家の方に行った水を川に戻す。				

5. 結論

実践 1、2 の分析から児童の実態に応じて体験活動を仕組んだ計画をつくり、児童が自分の意見を交流する場を授業に設けることで、児童が個々の考えを伝え合い問題を共有化し、経験した内容を自分なりの根拠として社会的事象を追求していくことが検証できた。また、教師の不要な発言を極力抑え児童中心の授業にすることで、発話の数として時間を追うごとに児童の追加や質問、反対といった発言の回数が増加する傾向にあることが分かった。

6. 研究の反省、今後の課題

(1) 【反省】

実践 1 において教師の発言が多く児童の思考の妨げになっていた。特に補助発問で学習問題につなげていこうとする傾向が強いことが分かった。体験活動の内容や教師の発言を抑えた実践 2 では、児童の実態をよく把握することでより効果的な単元を組むことや児童中心の授業を行うことにより、児童が社会的事象を自分事として捉え問題を追求していくことが分かった。

(2) 【課題】

実践 2 が終わった後の質問紙調査から該当学年の実態として社会科が好きであるという児童が多い一方で自分の考えを発言することに抵抗感がある児童が多いことが分かった。本研究で述べた自分の考えを交流するという観点から、より発言しやすい環境づくりが今後の課題である。

また、今回は子どもと教師の発話数と体験が根拠となる発話に着目してきた。考えの練り上げや学習問題を作る際にどの発話パターンが多いのか等、活動内容に応じた発話パターンの関係性を分析していきたい。それにより、より単元を通しての効果的な教師の介入や児童の発話について考えていきたい。